

— 総 説 —

## 海洋學談話會から日本海洋学会創立への道と初期10年\*

黒田 一紀†

### 要 旨

「海洋學談話會」は、農林省水産試験場の宇田道隆の発起により、海洋学に関する論著の紹介、試験研究成果の発表、および各職場の会員間の交流を目的として、1932年4月に開始された。東京・月島の水産試験場で月2回木曜日の例会は1941年2月の172回まで続き、実講演者は80名、延べ話題提供数は506件に達した。この実績に伴う海洋学への情熱と連携の高まりによって提唱された日本海洋学会の創立は、海洋气象台（神戸）に既存していた「海洋学会」と話し合いが行われたが、1937年前半に不調に帰した。その後、1939年末における標準海水準備委員会の立上げを切掛けとして、「海洋學談話會」と「海洋学会」との間に妥協が成立し、1941年1月28日に創立に至った。ここでは、「海洋學談話會」の発起、内容、切掛けおよび母体から日本海洋学会創立への紆余曲折の経緯を調べたので、関係科学者の役割も含めて報告する。

キーワード：海洋學談話會，海洋学会，日本海洋学会，宇田道隆，日高孝次

### 1. はじめに

日本海洋学会は、2021年1月28日には創立満80周年を迎える。創立以来の経過と内容は、既刊4回の記念号（表1）および10年報（日本海洋学会，1962・1992・2002・2013）に記録されてきた。中でも、学会にとって重要な創立時の経緯は1962年発行の「20年の歩み」に詳細に記載されている（宇田，1962a）。しかし、創立から時を経るにつれて創立時の会員は没し、創立時の史実や記録および思い出などの記載は20周年と50周年記念

号に限られている。その中の例外として、60周年記年号に掲載された中野猿人（気象庁，潮汐学）による思い出（中野，2002）は、日本海洋学会の前身母体である「海洋學談話會」の話であった。

筆者は「海洋學談話會」に興味を持ち、日本の海洋学（海洋科学）の歴史を扱った2つの資料を調べた。1つは宇田道隆による、日本の海洋研究はもとより世界の海洋研究に関する資料「海洋研究発達史」（東海大学出版会，1978年刊）で、もう1つは中野 広による、漁業と水産に関わる水産海洋学の足跡を詳細に辿った資料「近代日本の海洋調査のあゆみと水産振興」（恒星社厚生閣，2011年刊）である。しかしながら、両資料における「海洋學談話會」の記述は、前者では年表の中に1行の「1932年、東京に『海洋學談話會』生れる」のみで、後者では75頁に1932年の「海洋學談話會」の発足と1941年の「日本海洋学会」創立の記載があるが、その関係に関する言

\* 2020年1月9日受領 2020年2月8日受理  
著作権：日本海洋学会，2020年

† 〒275-0025 千葉県習志野市秋津3-6-1-1009  
TEL/FAX: 047-451-3727  
e-mail: kurodal21625@ivy.ocn.ne.jp

表 1. 日本海洋学会の創立記念誌の既刊と章立て

---

|   |
|---|
| <b>日本海洋学会 20 年の歩み (1962 年, 編集委員長: 中野猿人)</b>                 |
| 第 1 章: 日本海洋学会 20 年史   |
| 第 2 章: 日本における最近の海洋学の進歩                                      |
| 第 3 章: 海洋研究の協力体制  |
| 第 4 章: 海洋学とともに  |
| 第 5 章: 日本海洋学会創立 20 年周年事業について                                |
| 第 6 章: 附録   |
| <br>  |
| <b>日本海洋学会 50 年史 (1992 年, 海の研究 1 巻 1 号, 編集委員長: 増澤譲太郎)</b>    |
| 第 1 章: 日本海洋学会 50 年史   |
| 第 2 章: 海洋調査研究機関の紹介  |
| 第 3 章: 専門分野ごとの海洋学の進歩  |
| 第 4 章: 研究部会・委員会・支部  |
| 第 5 章: 国内外の研究協力体制   |
| 第 6 章: 日本海洋学会創立 50 周年記念事業報告                                 |
| <br>  |
| <b>日本海洋学会 60 周年記念号 (2002 年, 海の研究 11 巻 1 号, 編集委員長: 平 啓介)</b> |
| 第 1 章: 日本海洋学会 10 年 (1991-2000) の歩み                          |
| 第 2 章: 我が国の海洋科学の進歩  |
| 第 3 章: 会員が所属する海洋研究調査機関                                      |
| 第 4 章: 研究部会・委員会・支部  |
| 第 5 章: 国内外の研究協力体制   |
| 第 6 章: 1991 年～2000 年刊行の海洋学関連図書                              |
| 第 7 章: 日本海洋学会創立 60 周年記念事業                                   |
| <br>  |
| <b>創立 70 周年記念誌 (1941-2011) (2013 年, 編集委員長: 小川浩史)</b>        |
| 第 1 章: 日本海洋学会 10 年 (2001～2010 年度) の歩み                       |
| 第 2 章: 我が国の海洋科学の進歩  |
| 第 3 章: 研究会・支部   |
| 第 4 章: 70 周年記念シンポジウム講演者による寄稿                                |
| 第 5 章: 会員からのエッセイ  |

---

及を欠いていた。そこで、筆者は、東京海洋大学附属図書館の「アーカイブズ宇田道隆文庫」に保存されている資料を調べた。その結果、戦前の 1932 年 5 月に水産試験場の宇田道隆が所属組織を超えた海洋調査研究の情報交換の場として、「海洋學談話會」を開始したこと、さらに、この談話會が母体となり日本海洋学会創立に至った

ことが判明した。ところが、創立への道は、先行していた類似の「海洋学会」が神戸に既に存在していたので一筋縄には行かなかったことが浮び上がった。このため、日本海洋学会（初代会長：岡田武松）は、関連学会の日本陸水学会（1931 年 6 月創立、初代会長：田中阿歌麿）から約 10 年、日本水産学会（1932 年 2 月創立、初代会

長：伊谷以知二郎) から約 9 年遅れて、1941 年 1 月 28 日にずれ込み創立するに至った。

この報文では、「海洋學談話會」の経緯と内容および「日本海洋学会」創立への紆余曲折の葛藤を呈した道程を検証したので、その結果を報告する。さらに、創立時は日本が太平洋戦争に突入した同年に当り、学会活動の困難さが発生して、やがて中止となる期間を経て、活動の再開に至る苦難の初期 10 年における主な活動に関する諸資料をまとめて紹介する。なお、文中の主な科学者の略歴を、文末の付録に示す。

## 2. 水産試験場宇田道隆による「海洋學談話會」の発起と経過

「海洋學談話會」は、農林省水産試験場技師として勤務していた宇田道隆が水産講習所教授であった岡田光世と相談して発起し、水産試験場の宇田道隆(代表)、相川廣秋(副代表)、岡本五郎三(会計)の 3 名の談話会係(世話人)によって、1932 年 4 月 21 日に第 1 回集會が開催された。その目的は、海洋学に関連する内外の論著の紹介(研究発表を含む)、および各種の職場にいる会員間の交流であった。第 1 回集會の話題提供は、洋行帰りの岡田光世による「欧米測流法」、相川廣秋による「ニシン資源」、宇田道隆による「4m 採泥管」であった。当初の会員数は 28 名で、その内訳は水産試験場職員(19 名)を中心として、水産講習所(4 名)、海軍水路部(3 名)、中央气象台(1 名)、東京文理科大学(1 名)であった。通常の集會は、8 月を除く毎月 2 回の木曜日夜(18 時～20 時 30 分)に東京・月島の水産試験場で開催された。また、年会費は 60 銭という安さであった。選出された各組織の連絡委員は、海軍水路部(藤井義之)、海洋气象台(日高孝次)、中央气象台(中野猿人)、東京文理科大学(吉村信吉)、水産局(松浦義雄)、朝鮮総督府水産試験場(中井甚二郎)、地震研究所(高橋龍太郎)、水産講習所(岡田光世、新野 弘)であった。なお、本会の名称は、リーダー格でもあった海軍水路部第四課長小倉伸吉によって選定された(宇田, 1962ab; 中野, 1962・2002)。

中野(1962・2002)によると、本会の通常の出席者は 20 名程度(多い時には 30 名)で、常連会員は次の如くであった(順不同)。小倉伸吉、宇田道隆、岡田光世、吉村

信吉、田内森三郎、丸川久俊、末広恭雄、木村喜之助、相川廣秋、中井甚二郎、重松良一、荒川秀俊、山本祥吉、新野 弘、倉茂英次郎。海洋學談話會は年間最大 22 回のペースで実施されたので、1936 年 12 月 16 日には 100 回に達し、その記念として会員の物故者(村元朝一、小倉伸吉、岡村金太郎、寺田寅彦)の追悼座談會が開催された。

当時、東京から全国に広がっていた会員数は、当初の約 5 倍に当たる 148 名に達していた。しかし、当談話會に対する学会染みてきたとの批判や、会員数の増加による運営上の困難さも発生した上、春日信市水産試験場長からも学会化への心配や注意を再三受けていたので、宇田道隆はこの第 100 回をもって本会を清算中止する決意を持っていた(宇田, 1962b)。さらに、宇田(1962b)によると、この記念大会終了後の会食時に、重松良一海軍大佐(海軍水路部、当時)からこの談話會を發展的に解消して全国的な「日本海洋学会」創立の提議が出され、続いて岡田武松中央气象台長(当時)や田内森三郎水産講習所教授(当時)からその設立運営に関する意見が述べられた。それらの意見を受入れた宇田道隆は、翌年 1 月 15 日付の本会会計決算報告書に加えて、「近々全日本の海洋研究者を打って一丸とする『日本海洋学会』が誕生する模様ですから、学会設立の暁には本会会員の方々も全部もれなくご入会をお勧めいたす次第であります」という文章を世話人の連名で送付していた。

ところが、会食時における意見の開陳は自然発生的なものではなく、事前に仕組まれていたことが三宅・宇田(1941)と宇田(1962b)の報告から判明している。すなわち、「海洋學談話會」第 100 回記念大会の前に、次の打合わせが行われていた。

12 月 2 日：宇田道隆と岡田光世(水産講習所)および重松良一(水路部)は、中央气象台に岡田武松台長を訪ね、「日本海洋学会」の創立について協議した。

12 月 4 日：宇田道隆と岡田光世は田内森三郎を訪ね、「日本海洋学会」創立の手順を聞いた後、重松良一を訪問して意見を交換した。その結果、「海洋學談話會」の第 100 回記念大会時に「日本海洋学会」の創立を提案し、「岡田台長に学会の創立を一任しよう」との方針で臨むことにした。

12 月 5 日：宇田道隆は、水産試験場の丸川久俊(註：

1939年10月退職、当時東京にいた)、相川廣秋と学会創立について意見交換した(宇田, 1936)。

12月15日: 宇田道隆が東北冷害対策協議会(於: 農事試験場)で岡田武松に会った際に、「近日中に神戸の海洋気象台を訪問し、堀口由己台長代理と相談する」ことを聞いたので、宇田道隆は岡田光世、重松良一と会い、岡田武松の意向を伝え、翌日の会合の打合わせを行った。

第100回記念大会後、宇田道隆は岡田光世や重松良一らと奔走した結果、「日本海洋学会」の創立について、海洋気象台長を兼任していた岡田武松中央気象台長を通じて、当時の日本の海洋研究の中心であった海洋気象台(神戸)の「海洋学会」に提案した。しかし、結果は不調に終り具体化に至らなかった(宇田, 1962b; 経過を後述)。その結果、中断していた「海洋學談話會」を1937年6月に復活再開し、同年12月までに12回開催した(ただし、この6ヶ月間に開催された談話會の記録は残っていない)。第113回談話會は1938年1月13日に開催後、1941年2月15日の第172回まで続き終了した。

### 3. 「海洋學談話會」の内容

「海洋學談話會」は上述のように、10年弱に亘り172回の実績を重ねた。その講演者と提供話題は、東京海洋大学附属図書館ホームページ「アーカイブズ宇田道隆文庫」に掲載されており、ここでは省略する。1回の会では、2・3人の講演者から話題が提供され、実講演者は80人、提供された話題は506件に達した(表2)。個人別話題提供の上位10人は、次の通りである(括弧内は話題提供数)。

- ①宇田道隆(45)、②相川廣秋(36)、③新野 弘(36)、④吉村信吉(33)、⑤岡田光世(28)、⑥中野猿人(22)、⑦木村喜之助(19)、⑧稲葉伝三郎(18)、⑨松浦義雄(16)、⑩小倉伸吉(13)、⑪重松良一(11)、⑫山本祥吉(11)

なお、話題を10件提供したのは、今村学郎、丸川久俊、西村源三郎、末広恭雄、高橋龍太郎、であった。

講演数をみると、地元である水産試験場の会員(宇田道隆、相川廣秋、木村喜之助、山本祥吉、丸川久俊、末広恭雄)が圧倒的に多く、中でも世話役である宇田道隆、

相川廣秋の2名が上位を占め、「海洋學談話會」を牽引していたと言える。次いで、水産講習所の新野 弘、岡田光世、稲葉伝三郎による講演が多い。また、海軍水路部の重松良一と小倉伸吉も重要な会員として活躍している。講演の中で特筆すべき事項として、世話役宇田道隆の依頼に応じた寺田寅彦(東京帝国大学)が第54回談話會(1934年10月24日)に登場し、「日本海の海底地形について」と題する講演が大好評を博したことを、中野(2002)が描写している。また、中野(1962・2002)は、本会では世話役宇田道隆が司会することが習わしであったこと、また誰の講演にも熱心に耳を傾けて要点をノートしていたこと、さらに、終了後に毎回「海洋學談話會記事」を謄写刷りにして会員へ郵送したことをあげ、本会はこのような宇田道隆の熱意と奉仕に負う処が大きく、中野自身はそれに惹かれて努めて出席したことを述懐している。

### 4. 「海洋學談話會」発起の切掛けに関する考察

宇田道隆が「海洋學談話會」を発足させた時が1932年4月であった理由としては、以下の3点が考えられる。

#### 4.1. 宇田道隆の当時の立場

宇田道隆は1927年に東京帝国大学卒業後水産講習所に入所し、1929年に新設の水産試験場に転勤した。談話會を発足させた1932年4月21日にはまだ弱冠27歳の若さであったが、転勤後3年経過して水産試験場の仕事にも慣れ、第III部海洋調査部の水理係主任としての地歩を固めつつあった時期でもあった。

#### 4.2. 「水産物理談話會」の活動状況

水産物理談話會は田内森三郎(当時、水産講習所教授; 宇田道隆の10年先輩)が、1929年5月発起した会で、毎月水産講習所で例会を開催していた(影山, 1991)。会員は水産講習所と水産試験場の有志10名からなり、宇田道隆も常連として出席し、活発に話題提供を行っていた。水産物理談話會会報も手作りで発行されていたので、宇田道隆は1930年(5号)~1931年(30号)に初期の調査研究成果を15編も発表している。その後発展した水産物理談話會が母体となり、田内森三郎の努

表2. 「海洋学談話会」の講演者(ABC順)と講演回数(括弧)

---

①宇田道隆(45) ②相川廣秋(36) ③新野 弘(36) ④吉村信吉(33)  
 ④岡田光世(28) ⑤中野猿人(22) ⑥木村喜之助(19) ⑦稲葉伝三郎(18)  
 ⑧松浦義雄(16) ⑨小倉伸吉(13) ⑩重松良一(11) ⑩山本祥吉(11)

10回(5名): 今村学郎, 丸川久俊, 西村源六郎, 末広恭雄, 高橋龍太郎  
 9回(3名): 荒川秀俊, 斎藤宗一, 田内森三郎  
 8回(1名): 寺尾 新  
 7回(1名): 竹内能忠  
 6回(1名): 武富栄一  
 5回(5名): 日高孝次, 倉茂英次郎, 三宅泰雄, 鈴木 至, 山口生知  
 4回(5名): 藤井義之, 岸人三郎, 岡本五郎三, 関口鯉吉, 高山伊太郎  
 3回(7名): 福富孝次, 小西芳太郎, 日下部臺次郎, 桑原 新, 宮部直巳, 大村秀雄, 寺田寅彦  
 2回(19名): 浅利悦蔵, 大東信市, 藤原咲平, 牛奥貞夫, 石井一美, 岩田義一, 柿崎栖辞,  
 神谷鐘吉, 栗田 晋, 宮本秀明, 中井甚二郎, 小原信彦, 岡田武松, 奥野 博,  
 酒井森三郎, 佐藤 兌, 高橋泰彦, 殖田三郎, 宇野道夫  
 1回(34名): 庵原順一, 朝比奈貞一, 花岡 資, 本田幸市, 伊吹義一郎, 伊東孝一, 岩下 馨,  
 金 炳哲, 熊田頭四郎, 松尾春夫, 村元朝一, 長畑健二, 中野道夫, 中島由太郎,  
 新野二郎, 西田敬三, 尾原信彦, 岡村金太郎, 奥野 博, 大塚弥之助, 斎藤幸之助,  
 妹尾秀美, 正野重方, 須田皖次, 高橋浩一郎, 高山重嶺, 寺田一彦, 寺田寅彦,  
 坪井忠二, 筑紫次郎, 富永 斎, 富田豊一, 富山哲夫, 山下利得

以上

## 下線の表示説明:

太い実線: 水産試験場

実 線: 水産講習所

2重線: 気象臺

点 線: 海軍水路部

波 線: 東京帝国大學

力によって1932年2月に日本水産学会が創立した。

## 4.3. 当時の海洋関係部門の状況

我国の海洋重視に伴って、海洋関係従事者が増えていたが、横断的組織や連絡がなく、個々に活動していた。海洋調査部水理係主任の宇田道隆は、海洋関係従事者の情報交換の場として、身近かに見た「水産物理談話會」をモデルとする「海洋學談話會」を発起したと考えられ

る。その際、親友岡田光世(水産講習所教授)と相談し、海軍水路部の小倉伸吉と重松良一の助言を受け、水産試験場の同志と立上げたと推定される。

## 5. 老舗の「海洋学会」を持つ「海洋气象台」(神戸)

「海洋气象台」は、1920年8月26日付の勅令第294号にて、气象台の中に中央气象台(東京)と並立する一組

識として高層気象台（館野）と共に、日本における海洋気象の調査研究を担うため神戸に創立された。岡田武松初代台長の下に、職員は55名で、関口鯉吉、堀口由己、佃十吉、八鍬利助、平野烈介、川上宣孝、高山四郎、田口克敏、須田皖次、抜山大三、石井次郎、山田佐吉、大和隆、小西千比古、一木茂、高谷静馬、川崎英男、高島勉、などがいた。

神戸では、1919年10月に大阪から移転した中央気象台臨時神戸出張所（関口鯉吉所長）と並立する1906年開設の兵庫県神戸測候所（堀口由己所長、1912年～）の両職員による勉強会が行われ、1920年には「神戸読書会々報」（謄写版；第1号：5月5日発行；以後8月まで4号を発行）が刊行された。1920年8月26日の「海洋気象台」創立後、この「読書会」は1921年4月に「時習會」と改称し、5月には機関雑誌「海と空」（“Umi to Sora”または“Sea and Sky”）を創刊した（堀口、1930）。「時習會」は海洋気象台員と神戸測候所員の有志により構成された会員制（年会費：2円50銭）で、機関雑誌が月一回刊行された。当初の会員は気象台関係者のみに限られていたが、雑誌への投稿は会員外でも自由にできた。ちなみに、「時習會」の「時習」とは、論語にある言葉で、「学んだことを常に復習して、自分のものにする」という意味である（片山、1984）。

「海洋気象台」は、1922年6月に「海洋気象台欧文報告」を創刊し、1924年8月から「北太平洋天気図」を発行し始めた。さらに1927年には、待望の海洋観測船「春風丸」（125トン、船長：村田丑彦）が海洋観測を開始し、1929年7月からは海洋観測結果を掲載した「海洋時報」の発行を始め、「海洋時報」は第13巻4号（1943年3月発行）まで刊行された（神戸海洋気象台、1974）。その創刊号の序の中で、岡田武松台長は、「海洋調査の目的は単に学術研究のためのみでなく、航海・海運・水産などの事業の発展に必要な資料を取得すること」と説明している。その後、「時習會」は1930年8月1日に「海洋学会」と改称した。実は、この「海洋学会」案は、1921年の「時習會」誕生時に名称として一度計画されたものであったが、責任者である関口鯉吉所長と岡田武松台長が共に長期外国出張のため相談できなかったため、実現しなかったという経緯があった（堀口、1930）。よって、機関雑誌「海と空」は1929年12月発行の第9巻までを「時習會」

が、そして昭和5年発行の第10巻から「海洋学会」が発行している。

かくして、「海洋学会」は1944年3月1日に「海洋気象学会」と改称するまで続いたので、「海と空」は1944年3月発行の24巻3号から「海洋気象学会」が発行した。松平（1975）は、この改称を、1941年1月28日創立の「日本海洋学会」と名前が紛らわしいこと、また日本海洋学会創立時の責任者の一人である日高孝次などによる「海洋学会」を合併吸収するという提案を、「海洋気象台」が反対した結果であると説明した。さらに、片山（1984）は、「海洋気象台」が合併吸収に反対した理由として、1941年当時の「海洋学会」の会員数（購買者数）が970件位と最盛期にあり強気であったこと、「海洋気象台」が老舗として自尊心が強かったこと、を指摘している。

この間の1942年8月25日には、気象台の組織として函館海洋気象台（中野猿人初代台長）が開設されたので、「海洋気象台」は「神戸海洋気象台」と改称された。全盛期の「海洋気象台」には、堀口由己（海洋気象学、台長代理：1912-1939、台長：1939-1942）、関口鯉吉（太陽気象学、1920-1926）、佃十吉（気象学）、八鍬利助（気象学）、須田皖次（地震・海洋学、1921-1932）、日高孝次（海洋学、1927-1942）、岡田群司（クロノメーター、1927-1942、台長事務取扱：1942年9月30日-10月2日、台長心得：1943年9月25日-1944年3月3日）、松平康男（化学・生物学、1929-1946、台長：1946年3月30日-1956年6月5日）、中野健吾、壺井伊八（海洋学、1934-1936）、柳沢忠実（プランクトン、1933-1945）、佐野提二（海洋気象学、台長心得：1944年3月3日-1945年3月17日）、高谷静馬、川崎英男（1929-？）、高島勉、安井善一（1928-？）、肥沼寛一（黒潮研究、1932-？）などの多士済々の職員が名を連ねていた。

## 6. 「海洋學談話會」と「海洋学会」との話合いの経過

### 6.1. 第100回記念大会後「海洋學談話會」の取組みの経緯

宇田（1962b）によると、1936年12月における「海洋學談話會」第100回記念大会後の「日本海洋学会」創立

に関する取組みの概要は、次の通りである。

1936年12月20日：宇田道隆、岡田光世、重松良一が中央气象台長室に集まり、今後の取組みについて協議した。岡田武松（中央气象台長）曰く、「海洋气象台の対応は中々難しく、返事がすっきりしない」。

1937年1月4日：中央气象台で、岡田武松、宇田道隆、岡田光世、重松良一、吉村信吉、高橋龍太郎、荒川秀俊が集まり協議した。岡田武松によると、神戸の意見は、「海洋学会には触れてもらいたくない。（神戸の海洋学会とは）別に、（日本海洋学会は）東京の方で創ってほしい。創立したら、神戸の皆は入会する」との内容で、名称は「日本海洋学会」で、通俗的でない良い雑誌を作ることが大事であり、具体化のため検討を進めることを提案した。この時同席していた岡田光世は創立を諦めていたので、岡田武松の言の急変に驚いたらしい。

1937年1月5日：田内森三郎宅で、宇田道隆と岡田光世が具体化の打合わせを行い、名簿を調べ、発起人、幹事、顧問などの候補を検討した。

1937年2月18日：重松良一が宇田道隆を訪ね、3月4日に神戸に行くので、「海洋学会」を「日本海洋学会」にする提案を行い、難色を示す堀口由己台長代理と懇談する予定であることを伝える。別に、宇田道隆は神戸の日高孝次から、「神戸は“海と空”への愛恋を断ち難い」ことを伝える手紙を受取った。

1937年3月24日：宇田道隆は、岡田光世が起草した会則案を重松良一に手渡した。なお、会則案には、「日本海洋学会」に一本化するという「海洋學談話會」側の意向を表わしていたと推測される。

1937年5月8日：中央气象台で、宇田道隆、重松良一、荒川秀俊、丸川久俊（岡田台長は欠席）が会合した。重松良一が神戸の堀口由己台長代理との会談結果を報告し、「海洋气象台の創設および組織上、機関雑誌『海と空』は必要であり、日本海洋学会を作ることには賛成だが、神戸に本部を置くべきでない」との堀口台長の意見を伝えた。その後の協議で神戸の意見を、「海洋学会」を「日本海洋学会」として会員組織にすることには反対で、「海洋学会」とは別に「日本海洋学会」を創立することには同意する趣旨であると集約し、この旨を重松良一から欠席

の岡田武松に報告することとした。この時の事を、堀口（1952）は、「一時、『海と空』の編集発行は東京方面へ持って行こうと云う策動が一部にあったが、幸いに中止になってほっとした」と述懐し、また日高（1968）は、「岡田先生は神戸の堀口氏や私と相談に来訪したが、当時の海洋气象台の複雑な事情によって具体化せず停止した」と回顧している。

1937年6月9日：このような堂堂巡りの経過のうちに時が過ぎ、学会創立の機運が衰えて、時期尚早感が出てきたので、宇田道隆は「日本海洋学会」創立活動を保留し、中断していた「海洋學談話會」第101回を再開するに至った。

1936年当時の「海洋气象台」は、岡田武松台長であったが、本職である中央气象台長の兼務であったため、神戸を時々訪問して職務を果していた。よって、岡田武松が「日本海洋学会」の創立の提案を担って神戸で相談したのは、神戸測候所長の堀口由己台長代理と1927年に入台した日高孝次であった。創立当初から活躍した須田皖次が1932年に福岡管区气象台長に転出後、1937年当時の「海洋气象台」海洋部門には、代表格の日高孝次の他に、松平康男、柳沢忠実、肥沼寛一、安井善一、久保時男などが在籍したが、大多数の職員は気象畑の出身者が占めていた。よって、海洋学専門の日高孝次は当初から「日本海洋学会」の創立案に賛同する意見を持っていたので（日高、1968）、大勢を占める気象畑職員による、両学会の並立が望ましく、「海洋学会」を吸収する「日本海洋学会」の創立には反対であるという意見と対立しており、「海洋学会」としての集約が困難であったと推定される。

## 6.2 「海洋学会」と「海洋學談話會」の話合いの経過

1939年11月になって、「海洋学会」と「海洋學談話會」との間の話合い再開の動きがあった。1つは標準海水の作成委員会の設立で、もう1つは標準海水委員会を切掛けとする5月からの「海洋学会」の動静であった。前者は、第二次世界大戦の開始に伴ってデンマーク製標準海水の輸入が止って入手困難となり、海水の塩分検定に支障が生じてきたため、1939年11月に富永 斉（東北帝国大学教授）が提案して、少数の有志による「標準海水委

員会」を学術研究会議(文部省)内に設置し、日本製標準海水の作成に乗り出したことである(宇田, 1962a)。また、このグループは日本海洋学会の創立を前提として、その実現に急いで努力することを申し合わせていた(三宅・宇田, 1941)。その活動の一環として、1940年5月12-24日に中央気象台観測船「凌風丸」(1,200トン)に乗船し、標準海水作成のための海水採取を小笠原近海で実施した。その時の乗船科学者は、東北帝国大学の富永斉、海洋気象台の日高孝次、松平康男、中央気象台の三宅泰雄、京都帝国大学の石橋雅義であった(三宅, 1941; 日高, 1968)。さらに、日時は不明だが、その主旨を岡田武松中央気象台長に説明した処、台長は大賛成して学会の創立に動いたことを、富永(1962)は述懐している。なお、岡田武松は1939年11月1日に兼務の海洋気象台長を辞任後、1941年7月30日には中央気象台長を依願退職し、藤原咲平台長が引継いでいる。

宇田(1940)によると、宇田道隆は1940年7月9日に海軍水路部にて、「海洋気象台」の日高孝次と水路部の岸人三郎と会合した。また、9月26・27日には、上京した日高孝次と標準海水のことで相談し、翌日も被圧転倒温度計製作の見学に同道した。これは、両者が1年違いの先輩後輩の近い関係にあり、この機会を利用して、神戸と東京の状況を報告しあって、意思疎通を図った可能性がある。

三宅・宇田(1941)によると、1940年12月4日に「海洋気象台」の松平康男から、「新学会の人事条件と工作を依頼する」という手紙を受取った宇田道隆は、すぐに岡田光世と三宅泰雄と会合し、手紙の返事について協議した。この手紙の「人事条件と工作」の意味は不明であったが、宇田(1940)には、12月11日に松平康男が学会のことで上京来訪し、「日高氏を立てて」と強調したこと、「このことは、堀口台長の了解済みである」との記述があるので、その意味は明らかである。すなわち、「海洋学会」としては、海洋気象台海洋部門の旗頭である日高孝次を推薦して、新学会の人事に登用するようにとの要望であったと解釈される。結果として、日高孝次は相川廣秋と三宅泰雄と共に「日本海洋学会」の庶務幹事(3人制)に選出されることになる。

12月26日の学士会館で、宇田道隆は日高孝次と三宅泰雄の三人で予備会談の打合せを行った(宇田, 1940)。

この予備会談とは1月14日予定の創立準備会(表3)のことで、日高孝次が主導したものであった。このことは、次の記事からもさらに裏付けされる。すなわち、日高(1975)は、「海と空」の編集に長期間携わった経験から、『海洋学会』は海洋気象台職員を主対象とした会であり、全国の海洋学者が運営するものではない」との見解を元々持っており、また日高(1968)によると、「1940年12月に大局的に考えて、全国的な規模で『日本海洋学会』を創立する必要を認めるに至った」と記し、「宇田道隆、三宅泰雄、その他の東京の同志達も期せずして創立を支持した。」と述懐している。さらに、海洋気象台創立時の海洋学者である須田(1962)は、「日本海洋学会」の創立に関する記述の中で、「岡田先生は来神の度毎に『日本海洋学会』の創立について相談されたが、当初海洋気象台では既存の『海と空』(海洋学会)と新学会との関係について議論がまとまらなかった。しかし、種々の検討の結果、神戸の『海洋学会』を『海洋気象学会』と改称し、機関雑誌『海と空』を残すことで解決された」としている。このことは、「海洋学会」(神戸)の堀口台長が1932年から福岡管区気象台長に転勤していた須田皖次に「日本海洋学会」の創立問題について相談していたことを示している。よって、以上の経過は、1940年10-11月頃に、「海洋気象台」では松平康男が中心となって協議し、「海洋学会」を残して「海洋気象学会」に改称すること、日本海洋学会創立に賛同する代りに日高孝次を幹事に登用すること、の基本方針がまとめられたことを示している。そして、12月11日に上京した松平康男は宇田道隆と協議したので、12月12日以降に同意した「海洋学談話會」が、創立の準備に急ぎ入ったと推定される。

## 7. 「日本海洋学会」創立への道

### 7.1. 創立への事前準備

三宅・宇田(1941)によると、「日本海洋学会」創立は、以下の経過で準備された。

1941年1月14日：日高孝次の招請による日本海洋学会準備委員会が、銀座ユニオンクラブで開催された(表3)。出席者は、岡田光世、伊東孝一、宇田道隆、三宅泰雄、末廣恭雄、稲葉伝三郎、新野 弘、福富



表 3. 日高孝次氏発信案内状 (日本海洋學會創立前の準備会資料)

拝啓

光輝ある二千六百一年の初頭に当り、心から新春の御慶び申し述べます。

扱々、貴台におかせられましたは年来、日本海洋学会の進歩のために御盡瘁あらせられて居ることは感謝に堪えぬ所であります。

翻って、我国の現状を見まするに、海洋に対する各方面の発展は誠に目覚ましく、国運に寄与すること多大なるものあることは御同慶の至りであります。然し乍ら、その基礎となる可き海洋学全般の全日本的な総合機関の未だ存在せぬことは、真に遺憾に存ずる次第であります。日本の海洋学界を代表す可き學會の確立が、斯学の進歩に画期的発展を約束するは勿論、海国日本の体面から見ましても、かかる機関の不可欠なることに就いては、誰しも御異議なきことと存じます。不肖、甚だ微力をも省みませず全日本的海洋學會の結成について大方の御賛同を得たく、ここに発企打合會を目論見ました。何卒万障御繰合せ御参加下され、別紙協議事項に関し、忌憚なき御高見をお示めし願いたいと存じます。

敬具

昭和十六年一月七日

日高孝次

日時：昭和十六年一月十四日午後五時半

場所：深川越中島水産講習所

二伸：

猶、今回は次の如き方々に御参集をお願い致しました(順不同)。括弧は欠席者。

岡田光世、宇田道隆、稲葉伝三郎、殖田三郎、新野 弘、末廣恭雄、吉村信吉、富永 齐、伊東孝一、今井丈夫、大島幸吉、大東信市、桑原 新、福富孝治、山下 馨、丸田頼三、秋吉利雄、松平康男、三宅泰雄

孝治、桑原 新、吉村信吉、丸田頼三および日高孝次の 12 人であった。ここでは、来る 1 月 28 日に一ツ橋如水会館にて「日本海洋学会」の発会式を挙げる予定を伝え、会名、目的、事務所の場所、会誌、発起人名簿の作成、事務的事項に関する協議が行われた。

1941 年 1 月 18 日：宇田道隆、岡田光世、三宅泰雄が学士会館で会則原案と役員候補について協議した。

1941 年 1 月 25 日：中央气象台中村記念館で日本海洋学会準備委員会最終打合会を行い、設立総会の議事次第、会則草案、役員候補などを定め、出版は地人書館(上条 勇社長)に依頼することにした。出席者

は岡田武松、伊東孝一、岡田光世、小久保清治、桑原 新、正野重方、日高孝次、宇田道隆、松平康男、三宅泰雄、吉村信吉であった。

## 7.2. 「日本海洋学会」の創立

1 月 28 日に東京一ツ橋如水会館で「日本海洋学会」発起人会兼創立総会が開催された。発起人代表は伊東孝一(東京帝国大学教授)で、全国から参加した 45 名による総会は日高孝次座長の下に進行した。議事は会則を原案通りに可決した後、藤原咲平(中央气象台)の動議によって当日の出席者全員を評議員に推薦した。創立総会出席者(五十音順)は、次の通りである(三宅・宇田, 1941;

宇田, 1962a)。

青野壽郎, 朝比奈貞一, 朝比奈秀雄, 石井一美, 石野敬之, 石橋雅義, 伊東孝一, 伊藤徳之助, 岩田義一, 宇田道隆, 大羽真治, 岡田武松, 岡田光世, 岡本五郎三, 上條 勇, 木村健二郎, 桑原 新, 熊田頭四郎, 黒沼勝造, 斎藤宗一, 菅原 健, 関 重雄, 関谷健哉, 高橋龍太郎, 瀧 庸, 竹内能忠, 富永 斎, 中井信隆, 長友 寛, 新野 弘, 林 喬, 日高孝次, 福富孝治, 藤原咲平, 堀口由己, 松江吉行, 松尾春雄, 松平康男, 三浦栄五郎, 三宅泰雄, 宮地傳三郎, 山口生知, 山田琢雄, 山本祥吉, 渡邊信雄

選挙の結果, 会長に岡田武松(中央気象台長)が選出され, さらに庶務幹事(相川廣秋・日高孝次・三宅泰雄)と会計幹事(稲葉伝三郎・新野 弘・松江吉行)が決まった。以上の経過によって, 「海洋學談話會」が前身母体となって(中野, 1962), 紆余曲折の結果として「日本海洋学会」が誕生した。創立当時(1942年度)の役員名簿(表4)には, 当時の錚々たる海洋研究者が名を連ねている。しかしながら, 三宅(1944)は, まだ名称上の問題点が残っていることについて, 「現在, 『日本海洋学会』と『海洋学会』は並立しているの, いろいろな点において混同を来し, 誤解を招いている事実があるのは疑いない。本来的には, 『海洋学会』は『海洋気象台』の会といった程の意味であり, 本当の意味の学会ではなかったのである。私は, 『海洋学会』が行きがかりを一蹴して, 近い将来に適当な名称に改称されることを切望している」と述べている。

別に, 「日本海洋学会」の誕生を紹介する簡潔な報文の中で, 宇田(1941)は新学会の企画による一般向け啓蒙的月刊雑誌である「海洋の科学」発行の意義を明らかにした。以下に, 宇田道隆が持論とする珠玉の言葉を記す。

「学会の誕生は, 吾々の理想への一步に過ぎない。問題は今後であり, 従来ばらばらであった国内の海洋研究に関心を持つ人達が一つに統合されて協力し合い, 知識を磨き, 国家の最高目的に向って最大能力を発揮する必要がある。関係者は大海のような寛く大きな心を持って, 各省各部の狭い見地を離れた大きな意義に目覚めなければならぬ」。

「百川を合せる全ての成分を含む多彩な生物を抱擁する海の真の姿を明らかにするため, 海洋研究者は一つに融合すべき使命を持つ。海洋研究面で著しく遅れていた日本も, 実業の裏付けをする立派な科学があつてこそ, 初めて五大洋へ発展できる。この学会が正しく順調に生育し, 新しい海国日本の発展の母体になることを祈って止まない。」

## 8. 創立直後の10年(1941～1950年)

三宅(1962)によると, 創立後の「日本海洋学会」の主な取組みは, 2種類の機関誌, すなわち, 学術誌「日本海洋学会誌」を年4回発行するとともに, 啓蒙普及誌「海洋の科学」を毎月発行することであった。

後者は三宅泰雄編集委員長によって編集され, 1941年6月1日に創刊後, 地人書館(館主:上条 勇氏)から毎月発行された。この啓蒙普及誌の名称「海洋の科学」は岡田武松会長の発案によるもので, 創刊号に掲載されている会長の「創刊の辞」では, 「今回我国にとって重要な海洋研究に携わる同志が『日本海洋学会』を立上げ, 海洋知識の普及を図るために『海洋の科学』を刊行することが紹介されている。本誌掲載の広範な海洋学分野を紹介解説した特集記事が好評を博した結果, 多い時には8,000部を売上げた。しかし, 出版・発行は出版方針の違いのため, 第1巻7号(1941年12月)から出版元を当初の地人書館から小山書店(店主:小山久二郎氏)へ交代した。以後, 太平洋戦争の戦局悪化による用紙の確保難と紙質の低下の中で発行を続けていたが, さらに出版が困難となり, 1944年末の第4巻12号を以て休刊となった。なお, 第4巻10/11号合併号は製本所の火事のため, 焼け残っていたわずかな部数しか出版されなかった経緯がある。(註:東京海洋大学附属図書館には所蔵されている)。当初4年間の編集責任を担った三宅泰雄の果たした役割は高く評価されよう。戦後の発行は1948年になって再開され, 渡邊信雄編集委員によって第5巻1号(1948年6月)が, さらに木村喜之助編集委員によって同2/3/4号(1949年8月28日)と第6巻1号(1950年5月20日)が, 新たに黒潮書房(山本篤美社長)から発行された。6巻1号の末頁掲載の「海洋の科学」編集部による「第6巻の発行に當って」の記事の中に, 「本号か

表4. 日本海洋学会役員(昭和17年度)

---

|   |
|---|
| 會長：岡田武松   |
| 顧問：   |
| 大島 廣，春日信市，小池四郎，佐々茂雄，柴田雄次，杉浦保吉，関口鯉吉，<br>副島大助，西川虎吉，野満隆治，田中阿歌麿，畑井新喜司，原 十太，藤原咲平，<br>堀口由己，谷津直秀，矢部長克  |
| 評議員：  |
| 秋吉利雄，雨宮育作，石井四郎，石野敬之，岡田弥一郎，岡田 要，大羽真治，<br>岸人三郎，熊田頭四郎，関 重雄，関谷健哉，田内森三郎，高安三次，武富栄一，<br>田中耕之助，佃 十吉，寺尾 新，寺尾 博，中村左衛門太郎，長友 寛，西田敬三，<br>日比義三，平坂恭介，福永範一，松井佳一，松山基範，丸川久俊，三浦栄五郎，<br>三井高修，三宅驥一，山田琢雄，山本祥吉，横山登志丸   |
| 監事：   |
| 本田弘人，田中館秀三，伊東孝一   |
| 庶務幹事：編集幹事兼務   |
| 相川廣秋，日高孝次，三宅泰雄，宇田道隆   |
| 会計幹事：編集幹事兼務   |
| 稲葉伝三郎，松江吉行，新野 弘，岡田光世  |
| 編集幹事(編集代表者：三宅泰雄，事務主任：西山健児，事務員：山北もと子)  |
| 青野壽郎，朝比奈秀雄，朝比奈貞一，井伊直愛，井上直一，石井一美，石橋雅義，<br>伊藤徳之助，今井丈夫，岩田義一，殖田三郎，内田恵太郎，大塚昌三，大塚弥之助，<br>岡本五郎三，大島泰雄，尾原信彦，菅野利助，木村喜之助，木村健二郎，倉茂英次郎，<br>黒沼勝造，桑原 新，小久保清治，斎藤宗一，斎藤行正，正野重方，末廣恭雄，菅原 健，<br>鈴木好一，須田皖次，大東信市，高橋龍太郎，瀧 庸，竹内能忠，田村 正，塚本裕四郎，<br>富永 斎，富山哲夫，豊原義一，中井甚二郎，中井信隆，中野猿人，西村源六郎，<br>西山健児，畑井小虎，羽田良禾，林 喬，半沢正四郎，福富孝治，檜山義夫，松尾春雄，<br>松平康雄，松平近義，丸田頼三，宮地傳三郎，宮原 宣，宮部直己，柳澤忠實，山口生知，<br>山下 馨，山田幸男，吉村信吉，吉村甚吉，渡邊宗重，渡邊信雄 |

---

ら従来の会員への無料配布制から予約購読制に変更する」ことが記載されていたが、6巻1号を最終号として「海洋の科学」は廃刊になった。宇田(1962a)は、この廃刊の理由として、当時の出版事情の不安定さと木村喜之助編集委員の転勤を挙げ、出版の継続は懸案事項であると述べている。

一方、前者の「日本海洋学会誌」は「海洋の科学」より約1年遅れた1942年5月1日に三宅泰雄編集長の下に第1巻1/2号として創刊した。三宅編集長の下に第1巻(4号まで)を小山書店(小山久二郎社長)から発行し

た後、日高孝次編集長の下に第2巻(第1-4号, 1943年3-6月)と第3巻(第1-4号, 1943月-1944年9月)を発行していたが、戦争の影響のため1944年の第4巻1号の発行をもって休刊となった。戦後の発行は中野猿人編集長の下に再開し、1949年8月10日に第5巻1号を小山書店から発行後、年間4号の発行が維持された。なお、学会の録事が第5巻から時々記載されるようになった。

出版とは別の学会活動として、2回の例会が1941年4月15日と5月26日に開催されたが、戦争の影響で立ち消えになったようである。また、学会創立の功労者重松

良一が6月11日に、岡田光世が7月18日に逝去されたため、10月に学会主催追悼座談会が開催され、その記事が「海洋の科学」に掲載された（海洋の科学編集部，1941a）。

戦後直後における劣悪な住宅・交通・食糧事情と精神的虚脱状態の中で、休止していた日本海洋学会活動の再開に当たった岡田武松初代会長は、1948年5月25日に再開後初の総会で辞任し、第2代会長として日高孝次（東京帝国大学教授）が就任して1951年まで務めた。1952年からは毎年選挙で会長（1名）と副会長（2名）が選出されるようになったが、結果として、日高孝次は1966年まで23年間に亘って会長の任を継続した。また、1950年からは会長に加えて副会長が設けられ、宇田道隆（東海区水産研究所長）が就任した。その後、宇田道隆は1970年まで（1959年を除く）副会長を務めた。なお、学会事務局は1950年2月に中央気象台から東海区水産研究所（宇田道隆所長、渡邊信雄海洋科長）に移転した。

別に、事業としては、学会再開年の1948年10月15-17日に第1回日本海洋学会地方大会が函館支部（支部長：竹内能忠函館海洋気象台長）の主催によって、北海道水産試験場函館支場にて40余名の出席の下に開催され、15日に研究発表（26題）、16-17日に市内見学・通俗講演会・洞爺湖見学が挙行された（日本海洋学会，1949）。次の地方大会は、1950年10月30-31日に長崎の西海区水産研究所にて開催され、長崎地方支部設立総会、研究発表、市内見学が挙行された。発足した長崎地方支部の支部長に寺田一彦（長崎海洋気象台長）、副支部長に伊藤 佃（西海区水産研究所長）が選出され、支部事務局は長崎海洋気象台内に設けられた。また、支部評議員12名が選出され、支部幹事に安井善一と辻田時美が就任した（日本海洋学会，1951）。

## 9. 要約的まとめと見解

### 9.1. 「海洋學談話會」の実績

宇田道隆の発起により1932年5月に開始された海洋学とその関連分野の有志会員による勉強会である「海洋學談話會」では、多種多様な専門家が一堂に会して海洋学への情熱を吐露した結果、宇田道隆の熱心さと献身的

な努力によって9年弱の期間に172回の実績を重ねた。その資料はほぼ残っており、東京海洋大学附属図書館の「アーカイブズ宇田道隆文庫」の中にほぼ復元されている。

### 9.2. 「海洋學談話會」を発起した切っ掛け

このことに触れた資料は、宇田資料の中に見当たらない。筆者が事実関係から推測すると、水産講習所教授の田内森三郎の発起によって1929年5月から始まり、1932年2月に創立された日本水産学会の母体となった「水産物理談話會」がモデルになった可能性が高い。談話會の主要メンバーであった宇田道隆は、3年弱を経てこの談話會から日本水産学会が誕生したことを目の当りにした結果、自分が立地する海洋学分野でも同様なことが出来るのではないかと考えたと推測される。これは、「海洋學談話會」の発会が日本水産学会創立の3ヶ月後のことであったことから裏付けされる。

### 9.3. 「海洋學談話會」と「海洋学会」の葛藤

既往知見によると、「海洋學談話會」が日本海洋学会創立の母体になった事は知られていたが、創立の過程において海洋気象台に既存した「海洋学会」との間に当初の話合いが不調となり、日本海洋学会は両組織の葛藤の末に創立したという事実は、多くの人に知られていない。ただし、これに関する経過は断片的で理解しにくい面があり、また、両組織の仲介の労をとった岡田武松中央気象台長の役割も判然としていない。

「海洋學談話會」から「海洋学会」へ当初提案した内容は、「海洋学会」を吸収して一本化した形の日本海洋学会の創立を目指したものであったが、1937年当時の「海洋学会」は隆盛期にあり、かつ海洋気象台の維持運営にも必要だったので、代表者である堀口（1952）が東京からの提案を「策動」と表現したように、概して迷惑事項ととらえていたため神戸の意見がまとまらず、協議は不調に帰したと解釈できる。

2回目の話合いは、東北帝国大学の富永 斎が主宰した標準海水委員会の設立が切掛けとなり、当委員であった海洋気象台の日高孝次、松平康男と中央気象台の三宅泰雄の間で意思疎通が計られた結果、松平康男が、「海洋学会」は維持するが「海洋気象学会」と名称変更するこ

と、そして日高孝次を新学会の幹事に登用すること、とまとめた。その案を検討した「海洋學談話會」は協議の末妥協したと解釈される。

#### 9.4. 創立後の初期 10 年

1941 年 1 月に創立した日本海洋学会では、予定通りに日高孝次が主要な幹事に就いた代わりに、宇田道隆は辞退して平幹事に留まった経緯があった。このことは、日本海洋学会の創立に奔走した宇田道隆の謙虚さを示すものとして記憶に留めるに値する。運命のいたずらは、その後の宇田道隆は 1942 年に神戸海洋気象台長に就任することになり、一方日高孝次は中央気象台へ転勤し、東京帝国大学教授を併任することとなった。そして、戦後 1950 年からは、日本海洋学会は会長日高孝次、副会長宇田道隆の体制が約 18 年間続き、復興発展期を迎える。

なお、日本海洋学会の創立は戦時と重なり、創立後 10 年の活動は悪条件下で困難を極め、遂に中断の止む無きに至った。戦後、1948 年に再開した学会活動は第 2 代会長日高孝次の下に徐々に態勢の整備を進め、次第に軌道に乗って行く経過を辿った。その中で記録に留めておく事項として、当時好評を博した啓蒙普及誌「海洋の科学」の発行があった。本誌は海洋学の広範な知識を普及紹介する内容を持ち、学会の編集委員が企画編集して民間の出版社が印刷発行するもので、筆者も高く評価している。

我国は海国日本と呼ばれているが、四面海に囲まれた島国としては国民の海への関心は高いとは言えず、海洋知識の普及のために、現在でも、日本海洋学会としてこの種の企画を検討する値打ちがあると、筆者は考えている。

#### 9.5. 宇田道隆の出会いと人脈

宇田道隆は、1927 年 4 月に水産講習所（物理試験部）に東京帝国大学物理学科の同期生木村喜之助と共に入所し、主任の田内森三郎（大学の 10 年先輩）から「潮目の実験的研究」で指導を受けた。12 月には、大学の 1 年先輩である岡田光世が同部に入所し、以来親友となった。1929 年 4 月には水産講習所の組織改編によって、試験部と海洋調査部が分離独立して創立した水産試験場へ木村喜之助と共に転勤し、海洋調査部の水理係主任となった。5 月に発会した「水産物理談話會」に入会し、田内

森三郎の指導を引き続き受けた。かくして、宇田道隆にとって就職時の田内森三郎との出会いが「海洋學談話會」の発起に繋がり、さらに大きな人脈を生み出して、日本海洋学会の創立に達したと、筆者は推測している。

#### 9.6. 資料の有無と推測

最後に、本総説では少ない事実関係から多くのことを推測していることに留意されたい。史実的報文を記載するには、事実関係を示す資料の存在が不可欠である。東京海洋大学附属図書館の「アーカイブズ宇田道隆文庫」の資料の中には、メモ魔といわれた宇田道隆によって収集された資料や日記・メモなどが保存されており、かなりの事実関係を時系列に整理できた。しかし、テーマによっては資料が不十分のため、少ない事実関係から多くの推測をしている。筆者の推測の可否が新たな資料によって証明されることを願っている。

## 付 録

### 1) 相川廣秋 (1903 ~ 1962)

1903 年 1 月 1 日、山梨県生まれ。1925 年に東京帝国大学農学部水産学科を卒業後、農林省水産講習所に入り、1929 年からは新設の水産試験場に転じ 1941 年まで務めた。主な仕事は海洋プランクトンと水産資源の調査研究で、多くの業績を残した。1938 年、「日本短尾甲殻類ノ幼形ニ関スル研究」にて農学博士。1942 年に九州帝国大学教授に就任、さらに同大学天草臨海実験所、長崎大学教授を経て、1959 年水産庁調査研究部長に就き、津屋崎水産事務所長を併任。中央漁業調整審議会委員、日本学術会議会員。著書に、「海洋浮遊生物学」、「水産資源総論」(1949 年)、「水族生態学」、「資源生物学」などがある。1962 年 1 月没、享年 59 歳。

### 2) 岡田光世 (1902 ~ 1942)

1902 年 6 月 25 日、東京府麻布区筈町に出生。1926 年 5 月に東京帝国大学理学部物理学科卒業、同期生には日高孝次・坪井忠二・菊地正士・山内恭彦などがいる。卒業後同学部助手になり、同年 12 月 ~ 1927 年 10 月に志願兵として電信第 1 聯隊に兵役した。除隊後 12 月に水産講習所に入所し、宇田道隆と同じ物理試験部に加わった。その後、1929 年に水産講習所教授となり、海洋漁業

学・湖沼学・製造物理学・気象学・統計学・数学・物理学を担当した。1931年2月～1932年4月にベルリン大学海洋研究所に留学、海洋漁場学の研究を行った。1939年から海洋学教室主任に就任。謹厳実直な性格で、他人に寛容、自己に厳格な人格者として敬愛された。1941年1月の日本海洋学会の創立には多大な貢献をし、編集・会計幹事を担当した。1942年7月18日、臨時召集中に割腹自殺した(享年40歳)。将来を嘱望された科学者で、その死が惜しまれた(海洋の科学編集部, 1941a; 日高, 1941)。

### 3) 小倉伸吉 (1884～1936)

1884年仙台市生まれ。1910年7月に東京帝国大学理学部天文学科大学院を修了後、海軍水路部の嘱託になる。中央気象台の藤原咲平の1年先輩で、潮汐研究に一生を捧げ、1930年に「瀬戸内海の潮汐および潮流に関する研究」で、学士院賞を受賞。海軍大学航海学生に潮汐学を講義。寡黙で真面目な、かつ誠実な性格で知られ、「海洋學談話會」の名付け親でとして熱心な会員であった。著書に、「日本近海の潮汐」(1914年)、「物理海洋学」(岩波講座地理学)、「潮汐」,「潮の理」などがある。第5回太平洋学術会議(米)へ参加時の北太平洋における往復の船上で、水温・比重の観測を行ったエピソードがある(海洋の科学編集部, 1941b; 半沢, 1960)。

### 4) 重松良一 (1883～1941)

1883年10月9日、佐賀県西與賀村生まれ。1905年8月海軍少尉に任官後、1910年に大尉、同年12月に海軍大学校に入学、1911年12月に同大学校専修科を卒業。以後、「和泉」・「葛城」・「最上」・「韓峙」の航海長を歴任、1915年2月に「八雲」航海長心得に就く。同年5月に海軍大学校選科学生となり、海洋学を研究。1916年4月海軍少佐を経て、1917年7月に水路部部員。以後、1920年12月に海軍中佐、1923年11月に「大和」特務艦長、1924年10月に「満州」艦長となり、主に太平洋西部の海洋測量に従事して水路部海洋調査事業を育成。海洋學談話會では、水路部を代表する会員で、日本海洋学会の創立を提唱。14年12月の海軍大佐を経て、1927年12月に予備役、1928年1月以降水路部第五課の海洋及び気象特別調査を嘱託し、活発に活動。1941年6月11日没、享年58歳、自称戒名は、「大徹院青空碧海居士」(海洋の科学編集部, 1941a)。

### 5) 岡田武松 (1874～1956)

1874年8月17日、千葉県布佐生まれ。1899年に東京帝国大学理学部物理学科を卒業、中央気象台予報課(技手)に入る。1905年日本海海戦時の予報を担当。1911年に「梅雨論」で理学博士を取得、1912年に寺田寅彦・大森房吉らと気象談話會を組織。1913年に水産講習所の嘱託、気象学を1928年まで講義。1917年に海難防止のため海洋気象台設置に動き出し、1918年に中央気象台大阪臨時出張所を設置。1919年東北帝国大学教授を兼任。4月に海洋気象台を起工、10月に大阪臨時出張所を神戸に移す。1920年8月26日に神戸に海洋気象台を創設して初代所長に就任、1923年に第4代中央気象台長に就き、海洋気象台長を兼任。1927年に文化勲章を受章。1941年7月30日、依願免本官にて退職し、中央気象台気象調査事務を嘱託。1941-1948年、日本海洋学会初代会長を務める。1949年7月「文化勲章」を授賞。著書に、「気象学」「理論気象学」「測候瑣談」など。1956年9月2日没、享年83歳(須田, 1968)。

### 6) 田内森三郎 (1892～1973)

1892年5月15日、名古屋市生まれ。1917年7月、東京帝国大学理科大学理論物理学科を卒業。同12月歩兵第六聯隊に入営し、1918年8月にシベリアへ出兵、1919年11月に除隊後、1920年5月に水産講習所教授に就任。1927年4月、「網糸腐朽の物理」により東京帝国大学から理学博士を取得。1929年に水産講習所から水産試験場が分離独立したことを切掛けとして、5月に水産講習所物理学教室内に「水産物理談話會」を發起し、両組織の会員による毎月の例会を主導した。1932年2月にこの談話會を発展させて、日本水産学会の創設に貢献。1935年10月に第五回服部「報公賞」を受賞。1946-1949年に農林省水産試験場長を勤めた後、1949年6月から東京水産大学教授に就き、退官する1956年3月まで務める。1948-1956年に日本水産学会長を務める。1956年10月に日本大学農獣医学部講師(非常勤)を、1958年4月に三重県立大学講師(非常勤)を嘱託。物理学に立脚した独創的方法を用いて漁業の諸問題を解明し、水産学、特に漁の科学に貢献。著書に、「水産物理学」「漁の物理」「水産と物理」がある(影山, 1991; 野中, 2005)。

### 7) 須田皖次 (1892～1976)

1892年5月1日、群馬県勢多郡赤城村大字樽10番地

に出生。1913年3月群馬県師範学校本校第一部卒業後、逋信省に入り電氣局技術科(技手)就職。1918年9月に退職。東北帝国大学理学部物理学科に入学、1921年3月同卒業(理学士)。5月10日、神戸測候所に入所(技師)後、10月海洋気象台へ転勤。1926年3月13日、英・米・ノルウエーに留学(～1928年1月27日、約1.5年)後、海洋気象台初期の「春風丸」海洋観測に従事、海洋学者として縦横に活躍。1931・1932年、北海道帝国大学水産専門部(後の函館高等水産学校)講師を囑託。1932年11月1日に福岡管区気象台長へ転任。1933-1945年九州帝国大学工学部講師、1938年1月に理学博士を授与。1946年3月に中央気象台を定年退官後、11月に運輸省水路部長に就任(～1959年3月)、1948年5月12日には海上保安庁水路部長一等海上保安監に昇格。以後、1959年7月11日、三洋水路測量KK(代表取締役社長)に勤務、1962年4月1日に東海大学海洋学部初代学部長に就任。1965年11月3日、勲二等瑞宝章を叙勲。1967年3月31日、東海大学を退官、1972年4月1日に東海大学名誉教授。1976年2月19日没、享年83歳。(東海大学海洋学部、1977)。

#### 8) 日高孝次(1903～1984)

1903年11月4日、宮崎県宮崎郡広瀬村(現宮崎市)に出生。1926年に東京帝国大学理学部物理学科を卒業、中央気象台(技手)に就職。1927年に海洋気象台(神戸、技師)へ転勤、1942年まで16年間在職。1933年5月、東京帝国大学理学部にて博士号を授与、論文「湖沼の振動及び海流に関する海洋物理学的研究」。1934年に帝国学士院から「湖沼の振動及び下流に関する海洋物理学的研究」で東宮ご成婚記念賞を受賞。1941年に日本海洋学会創立に参画し、幹事に就任。1942年4月中央気象台海洋課(海洋掛長)へ転勤、東京帝国大学講師を兼任。7月1日八木艶子と再婚後、10月に東京帝国大学(理学部地球物理学科)教授に就任、以後1964年の退職まで在職。その間1943年11月、中央気象台海洋課長を兼任(～1948年6月)。戦後1946-1978年に日高パーティー主宰。1948～1966年の19年間第2代日本海洋学会長を務め、さらに1962-1964年の2年間東京大学海洋研究所初代所長に就任。退職後、東海大学客員教授および学習院大学講師に就き、1966年には海洋物理学における多数の功績に対して「モナコ大公アルベール一世記念メダル」を受

賞(日高、1968)。1984年8月15日、脳梗塞にて没(享年80歳)。

#### 9) 松平康雄(1903～1996)(論文・報告では、名前に康男を使用)

1903年7月17日、東京生まれ。第七高等学校を経て、1928年東京帝国大学農学部水産学科を卒業。1929年1月、海洋気象台(神戸)に奉職。海洋学・陸水学・気象学・浮遊生物学・水産学などの広範な分野に業績を残し、特に気象台の観測業務の中に、理化学調査に加えて生物学調査(特にプランクトン)を組入れた功績は大きい。1956年6月に広島大学水畜産学部教授として転勤するまで、(神戸)海洋気象台に長期に亘り在職し、戦前は科学者として活躍したが、1945年3-5月に台長心得、1946年3月-1956年6月に台長を務め、その卓抜とした人徳と統率力によって、戦中・戦後の困難な時代における海洋気象業務の重責を全うした。その間、1952年に京都大学から理学博士号を取得。1967年3月定年退職するまでの広島大学時代には、水産学科の水産海洋学講座を主宰し、その間水畜産学部長を3期6年間務めた。退職後、三重大学水産学部の非常勤講師を囑託。学生時代には、ラグビーやボートの選手として活躍したスポーツマンで、広島大学時代には硬式テニスを好んだ。酒も嗜み、談論風発、寸鉄人を刺す舌鋒で有名。1996年3月14日、脳動脈硬化症により逝去、享年92歳(遠部、1996)。

#### 10) 三宅泰雄(1908～1990)

1908年、岡山市生まれ。1931年に東京帝国大学理学部化学科卒業後、北海道帝国大学理学部(助手、1931-1935)を経て、中央気象台(化学主任、1935-1946)に勤務。1940年に「西部北太平洋の化学的研究」にて東京帝国大学理学博士号を取得。16年の日本海洋学会創立には多大の貢献を果し、1974-1978年に第5代会長に就任。1967年には「天然および人工放射能同位体ならびに安定同位体を中心とする海洋化学的研究」にて日本海洋学会賞を受賞。戦後、気象研究所の創設に奔走し、1951年に同研究所地球化学研究部長(1946-1957)に就任。1957年以降東京教育大学(理学部)教授を併任、1972年に定年退官。この間、1954年のビキニ環礁における米国の水爆実験で「第五福竜丸」が死の灰を浴びて以来、地球化学者としての責任感から放射能問題に取組み、原水爆禁止運動にも参加。1952年に日本地球化学会を創立し、会

長(1967-1971)を務めた。専門は地球化学、海洋学、原子力問題などで、日本気象学会藤原賞(1974年)・日本海水学会功労章(1977年)を受賞。1990年10月16日逝去、享年82歳(三宅, 1988; 鳥羽, 1990)。

## 謝 辞

本論文を作成するに当たり、適切なご指摘をいただいた元東京水産大学教授大塚一志博士に、また全面的な協力をいただいた宇田道隆資料保存会の皆様に深甚の謝意を表します。

## References

- 半沢正男(1960):小倉伸吉。和達清夫監修:海洋の辞典, pp. 48, 東京堂KK, 東京。
- 日高孝次(1941):岡田光世君の訃報。海洋時報, **13** (3), 318-319, 海洋気象台, 神戸。
- 日高孝次(1968):海洋学との40年。日本放送出版協会, 東京, 253 pp.
- 日高孝次(1975):神戸生活15年の思い出。海と空, **50**, 3-4, 海洋気象学会, 神戸。
- 堀口由己(1930):「海と空」十年。海と空, **10** (8), 247-250, 海洋学会, 神戸。
- 堀口由己(1952):追憶。海と空, **30** (1/2), 2, 海洋気象学会, 神戸。
- 影山昇(1991):田内森三郎の自己表現と水産の科学化—寅彦門下の水産学徒の生涯—。東京水産大学論集, (26), 21-67。
- 海洋の科学編集部(1941a):故重松良一大佐・故岡田光世教授追悼座談会。海洋の科学, **1** (7), 44-59, 小山書店, 東京。
- 海洋の科学編集部(1941b):海洋学者の憶ひ出(3)小倉伸吉博士を語る。海洋の科学, **1** (3), 48-50, 地人書館, 東京。
- 片山昭(1984):「海と空」の側面史。海と空, **60** (1), 5-14, 海洋気象学会, 神戸。
- 神戸海洋気象台(1974):神戸海洋気象台沿革史。神戸海洋気象台彙報, 特別号, pp. 1-24。
- 松平康男(1975):「海と空」誌の回顧談。海と空, **50** (2/3), 37-38, 海洋気象学会。
- 三宅泰雄(1941):標準海水採水記(東京-父島-硫黄島)。海洋の科学, **1** (3), 41-47, 地人書館, 東京。
- 三宅泰雄(1944):日本海洋学・最近の進歩。海洋の科学, **4** (1), 1-9, 小山書店, 東京。
- 三宅泰雄(1962):「海洋の科学」の思い出。日本海洋学会20年の歩み, pp. 156-157。
- 三宅泰雄(1988):研究室の窓から。水曜社, 東京, 162 pp.
- 三宅泰雄・宇田道隆(1941):日本海洋学会の創立。海洋の科学, **1** (1), 53-55, 地人書館, 東京。
- 中野 広(2011)近代日本の海洋調査のあゆみと水産振興。307 pp., 恒星社厚生閣, 東京。
- 中野猿人(1962):日本海洋学会。日本海洋学会20年の歩み, pp. 146-148。
- 中野猿人(2002):日本海洋学会創立当時の思い出。日本海洋学会創立60周年記念号。海の研究, **11** (1), 192-194。
- 日本海洋学会(1949):日本海洋学会函館地方大会記。日本海洋学会誌, **5** (1), 47-54。
- 日本海洋学会(1951):日本海洋学会長崎支部発会式記事。日本海洋学会誌, **7** (3/4), 8-11。
- 日本海洋学会(1962):日本海洋学会20年の歩み。213 pp.
- 日本海洋学会(1992):日本海洋学会50年史。海の研究, **1** (1), 1-228。
- 日本海洋学会(2002):日本海洋学会創立60周年記念号。海の研究, **11** (1), 1-194。
- 日本海洋学会(2013):日本海洋学会創立70周年記念誌。78 pp.
- 野中 忠(2005):田内森三郎。楽水の人びと抄, p. 82, 生物研究社, 東京。
- 遠部 卓(1996):松平康雄博士(1903-1996)。日本プランクトン学会報, **43** (2), 70-71。
- 須田皖次(1962):学会創立当時と岡田先生。日本海洋学会20年の歩み, pp. 148-151。
- 須田滝雄(1968):岡田武松伝。岩波書店, 東京, 612 pp.
- 鳥羽良明(1990):元日本海洋学会会長三宅泰雄先生を悼む。日本海洋学会誌, **46** (5), 195-200。
- 富永 斉(1962):標準海水。日本海洋学会20年の歩み, pp. 128-129, 日本海洋学会。
- 東海大学海洋学部(1977):東海大学名誉教授理学博士須田皖次。東海大学海洋学部紀要, (10), 1+研究業績表。
- 宇田道隆(1936・1940):日記。
- 宇田道隆(1941):日本海洋学会の誕生。科学知識, **21** (3), 115, 科学知識普及会。
- 宇田道隆(1962a):日本海洋学会20年史。日本海洋学会20年の歩み, pp. 1-16, 日本海洋学会。
- 宇田道隆(1962b):日本海洋学会創立当時の思い出。日本海洋学会20年の歩み, pp. 137-138, 日本海洋学会。
- 宇田道隆(1978)海洋研究発達史(海洋科学講座補巻)。331 pp., 東海大学出版会, 東京。



## The process to the establishment of “the Oceanographic Society of Japan” from its mother “the Colloquium on Oceanography” and the first decade afterwards

Kazunori Kuroda<sup>†</sup>

### Abstract

“The Colloquium on Oceanography” was initiated by a chief scientist, Michitaka Uda, of the Imperial Fisheries Institute, in April, 1932, to introduce papers, present one’s study results, and promote information exchange between members. Bi-monthly meetings, which were held on Thursdays at the Imperial Fisheries Institute, eventually led to 172 meetings and 506 lectures by 80 members until February, 1942. The cooperation between members and fervor for oceanography resulted in the proposal to create “the Oceanographic Society of Japan” in 1936. However, the proposal of “Kaiyo-Gakkai,” which had been previously presented at the Imperial Marine Observatory in Kobe, failed in the first half of 1937. The mutual consultation between “Kaiyo-Gakkai” and “the Colloquium on Oceanography” succeeded in building a committee on “Standard Sea Water” in December, 1939, and subsequently, “the Oceanographic Society of Japan” was established on January 28, 1941. In this study, the authors describe the examination of the proposal, contents, and details that led of the foundation of “the Oceanographic Society of Japan,” including participation by some scientists

**Key words:** Colloquium on oceanography, Kaiyo-Gakkai, Oceanographic Society of Japan, Michitaka Uda, Koji Hidaka

(Corresponding author’s e-mail address: kurodal21625@ivy.ocn.ne.jp)

(Received 9 January 2020; accepted 8 January 2020)

(doi: 10.5928/kaiyou.29.2\_37)

(Copyright by the Oceanographic Society of Japan, 2020)

---

<sup>†</sup> 3-6-1-1009, Akitsu, Narashino, Chiba, 275-0025, Japan

TEL/FAX: +81474513727

Corresponding author’s e-mail address: kurodal21625@ivy.ocn.ne.jp